

森瑤子

終り

L'esthétique
de l'adieu

の美学



L'esthétique
de l'adieu

終りの美学

森瑤子

角川書店

終りの美学



森 瑤子

1993年5月30日 初版発行

発行者／角川春樹

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 〒102 振替 東京3-195208

TEL 営業03-3817-8521 編集03-3817-8451

印刷所／暁印刷株式会社

製本所／株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Printed in Japan ISBN4-04-872760-5 C0093

終りの美学

装丁
亀海昌次

終りの美学

目次

偏西風

8 ある別れ

14 再婚

20 愛の天秤てんびん

26 スマイル ライク エジプシャン

32 笑いのレッスン

39 独りが素敵

45 あれもしたい これもしたい

51 トイレットおばさん

57 女の連帯感

63 仮死夫婦

69 お気楽に反省

75 遊びのすすめ

リゾート便り

82 I LOVE NEW YORK

88 I LOVE NEW YORK II

94 イスラエルの熱い風

101 香港汁かけ御飯論

106 ヨロン島の熱い砂

111 MY HONG KONG

118 バンコックの熱い二十四時間

125 カサブランカの刻は過ぎゆきて
アズ・タイム・プリーズ・バイ

131 カスバの休日

138 ガウディに魅せられて

145 甘美な島流し

151 ハワイでブービー賞

風の噂うわさ

158 1:00 A.M. 夜の魔術

161 2:00 A.M. 舞台の後

165 3:00 A.M. 午前三時の幽霊

169 4:00 A.M. 眠れぬ夜

173 5:00 A.M. ゴルフの朝

177 6:00 A.M. 早起きは三文の得

181 7:00 A.M. 歴史は朝作られる

185 8:00 A.M. 朝の悲劇

189

9:00 A.M. 贅ぜいたく沢な空間

193

10:00 A.M. ブランチ

197

11:00 A.M. 消えた時間

201

12:00 P.M. 木は考える

205

1:00 P.M. 美人はイメージで造られる

209

2:00 P.M. 鎖骨美人

212

3:00 P.M. ハイテイー

216

4:00 P.M. 知的筋肉

220

5:00 P.M. 黄昏たそがれ刻どき

224

6:00 P.M. 牧場の夕食

228

7:00 P.M. 傷心のスカーレット

232

8:00 P.M. 最後のハシゴ酒

236

9:00 P.M. 記憶って何だろう？

240

10:00 P.M. 門限戦争

244

11:00 P.M. 病気休暇

247

0:00 A.M. 年の終り

偏
西
風

ある別れ

自他共に親友と認めあっている男友たちから電話がかかってきた。

「久しぶり」

と彼がいかに楽しそうに言った。

「何を言ってるのよ。先週飲んだばかりじゃないの。下手なカラオケ聴かされて」
不運なことに花の木曜日で——タクシーが全然みつからない。

寒風吹きすさぶ路上で、いつ通りかかるともしれない空車を待っていると、冷たさが足元から忍び寄る。

「少し時間をつぶそうや」

と彼が言い、私たちはバーのハシゴのハシゴのそのまたハシゴ。

ようやくタクシーが拾えたのは午前一時半過ぎ。こんな時間に帰れば亭主殿の爆弾が落

ちるのにきまっている。

「どうしたのさ、元氣ないね」

と悪友は言うけれど、家庭の事情などいちいち明かさないので友情のルール。

「飲みすぎ。それにあなたの下手な唄のせい」

さて、寝静まった我が家。ぬき足さし足しのび足。どうか敵様が目を覚ましませんように。

と祈ったのだが……。

敵様はパッチリとお目覚めで、全身怒りで硬直している。あとはおきまりのフルコース。ドンドンパチパチ一戦を交えてベッドにぶつたおれる頃には、窓の外が暁の灰白さに染まっていた。

しかし友だちにはそのような内紛については暖気にも出さず、ましてや、あの夜私が必死に死守したのは、彼との友情なのだった、などということもチラとももらしてはならないのだ。

「あなたのせいで亭主と大喧嘩したのよ」

などといえば相手は責任を感じる。

「うちの亭主、どうやらあなたと私の仲を疑っているみたいなの」

こんなことも言ってはならない。友情に微妙にヒビが入るのにきまっている。

こういう場合男友だちというのは、次の二つに一つの行動に出る。ひとつは自分のせいでこの女が絶体絶命の状態に追いつめられているのだ、亭主から責めさいなまれているのだと思いつめ、正義感から責任を取ろうとする。つまり「妻と別れてきみと一緒にいるよ」と言いだすタイプだ。

今ひとつは、逃避するタイプ。「こいつはなんだかヤバイことになりそうだぞ」と警戒して、それを潮に急に疎遠になってしまったりする。

どっちに転んでも、友人を一人失うことには変りはない。だから一生ものの男友だちは、めったなことではプライベートルाइフを口外すべきではないのだ。たとえ彼自身のことや夫婦喧嘩の原因であろうともだ。いや、彼のことや喧嘩の原因であればなおのことである。

話を一番前の電話に戻そう。

「ちょっと話したいことがあるんだけどね」と彼。

「電話じゃなんだから、今夜逢おうか」

「電話でもいいわよ」

と、私は慌てて言った。今夜はまたしても『花木』——、魔の木曜日である。友だちとちょっと飲んでいる間にタクシーが拾えなくなる。そうなれば夫婦喧嘩のフルコース。

「実は女房のことなんだ」

と、彼は急に慎重になる。

「どうかしたの、奥さん？」

「どうやら僕ときみの仲を疑っているらしい」

「疑うたって……。私たちただの友だぢじゃないの。他に何人もいるあなたの飲み友だちの女の一人にすぎないのよ」

「そう説明したよ、僕も」

「なら何が問題なの？」

「否定するのはますます怪しい、というんだ」

「なるほど」

それはわからないでもない。我が亭主殿も似たり寄ったりだから。

「それに女房が言うには、友だちってのが一番悪いそうだ。愛人なら適当な時期にお互い愛想がつきて別れる。友だちってのは下手をすると一生続く。大体、異性の友だちに対しては、男は大甘に優しくなる。妻にもめったに見せないような柔らかいまなざしで、他の女なんて見つめて欲しくない。とこう言うんだな」

私は黙った。女として彼の妻の気持は痛いほどわかるからだ。私の亭主殿の不満も言ってみれば同じことなのである。しかし手前の家庭の事情など死んでも口にするものか。

「わかった。で、あなたはもうしたいの？」

と私は、やけに優しい声で訊いてやった。

「きみとの友情はかけがえもないが、妻との仲が壊れては元も子もない」

「その気持わかるわ」

と口では言ったが、憤懣やるかたない私。時には、何よりも大事なのが友情なのだ。女房の一人も説得できないなんて。

ま、その程度で切れる友情なら、たいしたことはなかったのかもしれない。

というわけで、十五、六年になんなんとする友人を、最近私は一人失った。

奥さんの気持はよくわかる。私の亭主殿の不満もわかる。けれども異性の友だちと多くて二月に一回、年にして五、六回、お酒を飲んで、お喋りするとはそんなに罪なことなのであろうか。

なんだかひどくしんどい時、妻にも言えない、恋人にも喋りたくないことを、女友だちとなら話しあえる。ちょっとぬるめの温泉にゆっくりとつかったような気分になれる。それで亭主殿が眉間の皺をとって戻ってくれば、口論がひとつ避けられようというものである。私にとっての男友だちというのも、そういう存在である。

結婚している男なり女が、異性の友だちを持って良いか悪いかを、私は問うているのではない。そういう問題ではなく、結婚そのもの、あるいは愛について考えてみたいのだ。

愛とは決して人を縛るものではないはずだ。自分の愛する人が、常にハッピーでいることが自分にとっても一番うれしいこと。それが愛するということではないだろうか。

でもたいていの場合、相手の心のことなど二の次になっている。愛する相手がハッピーかどうかより、自分がハッピーかどうかがまず先になる。

私が嫌なのだから、あなたもしないで、という発想だ。相手の立場ではなく、自分の都合だけで考えているわけだ。

これは何も男友だち、女友だちだけの次元のことではない。私が嫌なんだからしないでちょうだいというのは、愛の押し売りである。

もしかしたら愛とは全然関係がないのかもしれない。

あなたが楽しい気持、温かい気持、良い気持でいてくれることが、私にとっても一番いいことなのよ、と言えたら、それが本当の愛なのではないだろうか。

それにしてもあいつ、家庭の事情など恥ずかしげもなく口にして、と私は未だにおさまりがつかない。友情のルール違反である。

再婚

結婚に失敗した女は、二度と結婚だけはしたくないと例外なく言う。

離婚に至るプロセスは、男も女も同じように傷つき、惨めな修羅場を演じるのではあるが、離婚後の男女の反応は天と地ほど違うのである。

ほとんどの男が、あれほどこりこりしたはずの結婚に、驚くばかりの早さで再突入してしまうのは、どういうわけだろうか？

早い話が、男は前の妻にこりこりしたのであって、結婚生活そのものではないらしい。女の方は、前夫にも嫌気がさしたが、結婚そのものにこりてしまったのである。そのところが、男と女では決定的に違うのだ。

男はあくまでも、悪いのは前妻との相性であると考える。次の女は前の時とは全く違わだろうと思う。ロマンティストなのだ。